中村陽一教授のご退職に寄せて

Farewell Message for Professor Yoichi Nakamura

長　有紀枝
OSA Yukie

本年度末、2022 年 3 月をもって研究科の礎を築き、研究科とともに歩んでこられた中村陽一教授が退職される。2002 年の研究科設立以来（正確には準備段階から）北山晴一・笠原清志両名誉教授らとともに、中村先生は、研究科の創設に尽力され、以後 20 年にわたりその屋台骨を支え、研究科の文字通りの「顔」、そして社会デザイン学の象徴的な存在として歩んでこられた。

中村先生のご功績は計り知れず、研究・教育のみならず、研究科の創設期は専攻主任（当時は修士課程のみだったため、専攻全体の主任）として、北山名誉教授のご退官後は、研究科委員長・独立研究科運営部長として研究科および独立研究科の運営を中心的に担われた。加えて、文部科学省「派遣型高度人材育成協同プラン」採択事業として研究科と企業とのネットワークの拡充や企業人の入学者増につながった「CSR インターンシップ・プログラム」の起案から事業遂行までの全てを担われるとともに、社会デザイン研究所における各種プロジェクトの起案および運営、研究会の設立・運営などの実践、日経ビジネススクールと共同の「ソーシャルデザイン集中講座」の企画・運営、大和ハウス工業株式会社の寄付講座の運営、様々な自治体との連携などその縦横無尽なネットワーク、社会デザインの実践は枚挙にいとまがない。その中村先生のご退職は研究科にとり偉大な支柱の一本を失うことになる一大事であるが、その出来事を「喪失」で終わらせず、研究科にとっても、中村先生ご自身にとっても、新たな出発となる「ゼロ」地点の確認として、中村先生の歩みを振り返らせていただきたい。

中村先生は 1980 年 3 月一橋大学の社会学部社会学科をご卒業された。ある時、学部時代の思い出を語られた際、「一橋大学の社会学部は、社会学ではなく社会科学全般を総合する学部である」と恩師や後に担当編集者としても交流を深めることになる戦後社会科学の碩学・高島善哉一橋大学名誉教授から薫陶を受けたというエピソードをうかがったことがある。そのような場所で中村先生が、学問の基礎を学ばれたということは、広範な領域を扱う社会デザイン学の原点につながるように思われる。

ご卒業後、中村先生は株式会社新評論に就職され、社会人としての第一歩を編集者としてスタートさせる。その後、日本生活協同組合連合会を経て、非営利独立ネットワーク型シンク＆ドゥタンクとして消費社会研究センターを立ち上げた後、1996 年に都留文科大学に奉職され、2002 年研究科の設立まで勤務される。この間の編集者、民

間在野における社会活動の実務家、そして研究者としての歩みは、21 世紀社会デザイン研究科での教育そして、社会デザイン学の発展の基礎となったと拝察される。

編集者時代の中村先生は、ソ連の崩壊を内部の民族問題から明晰に予言したエレーヌ＝カレル・ダンコース『崩壊した帝国』、20 世紀を代表する歴史家・思想家の一人であるイヴァン・イリイチの数多くの著作、「新しい歴史学」として学界・思想界に大きな影響を与えたフランスのアナール派の大量の著作といった重要な作品の紹介に関わられた。その他、異色の仕事としては、ジョン・レノンへのオマージュをフランスの漫画家たちが捧げた作品に日本版独自編集として吉岡忍さんがインタビュアーとなって日本の識者たちに聞いたインタビュー集と横尾忠則さんによるポスターなどを付けた『LOVE JOHN LENNON』もある。これら編集者時代とその後の実務における人脈は社会デザインの幅を広げるとともに、教育者としては、論文指導の際の鋭い指摘に十二分に生かされたと考える。

さて、中村先生の本学でのご功績を振り返ることは、とりもなおさず、研究科そして、社会デザイン学の歩みそのものを振り返ることにもつながる。2021 年度で設立 20 周年を迎えた 21 世紀社会デザイン研究科の歩みは、中村先生ご自身の歩みであるとともに、社会デザイン学の歩みでもあるからである。ここからは、中村先生が 2021 年 7 月の社会デザイン学会年次大会で使用されたスライドをもとに、その功績を辿ってみたい。

まずは、中村先生ご自身がその中心におられた研究科の歩みを振り返る。2002 年 4 月「立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻（修士課程）」が設置、5 年後の 2007 年 4 月 には区分制大学院としてその博士課程後期課程が設置される。この前年、2006 年 6 月 には 21 世紀社会デザイン研究学会［現・社会デザイン学会］が設立され、2008 年 10 月 には研究科附置研究所「立教大学社会デザイン研究所」が発足する。中村先生はこのいずれの組織の設立にも、中心人物のお一人として関わられたわけだが、そこでいう社会とは、社会デザインとは何か。

中村先生によれば 21 世紀に入り、環境や地域紛争など前世紀からの宿題に加え、新しい形の貧困や社会的排除（social exclusion）が世界と日本の大きな課題となっている。その解決のため、従来の発想と方法論を超え、「社会」の仕組みや人びとの参画の仕方を変革し、具体的に実現していくための思考と実践が求められている。ここでいう「社会」とは――「異なる人間たちが、限られた空間のなかでともに住み合っていくことを可能にする知恵あるいは仕掛けの総体」である。 中村先生は、ジンメルの『社会分化論』を参照しつつ、社会デザインを、無から有を生み出すのではなく、今あるものの組み合わせを変える、オルタナティブ思考、デザイン思考でもあるとする。

では、そもそも design とは何なのか。中村先生はそれは日本で従来考えられてきたように、製品やサービスの単なる設計や絵を描くことに留まるものではないとし、河北秀也氏のデザイン論を紹介する。氏の言うデザインとは、「人間の創造力、構想力をもって生活、産業、環境に働きかけ、その改善を図る営み」であり、「人間の幸せとい

う大きな目的のもとに、創造力、構想力を駆使し、私達の周囲に働きかけ、様々な関係を調整する行為」を総称して『デザイン』と呼ぶ」(河北『河北秀也のデザイン原論』新曜社、1989 年)。

ではなぜ社会デザインなのか？　中村先生は、この問いに答えるために、社会デザインの前史を遡り、非常に興味深い分析を展開しておられる。社会デザインには前史（体験と経験の諸相）があるとし、まず、「サードセクター版の前史」として、社会運動（市民運動・住民運動～新しい社会運動)、ボランティア活動（生活の場からの地殻変動～ネットワーキング)、NPO/NGO、ソーシャルビジネス／コミュニティビジネスの 4 段階を提示する。

また「壁を突破する社会デザイン」として、「エイブルな社会デザインにも前史（体験と経験の諸相）がある」ことを示された。すなわち、バリアフリー（バリア、課題の ソリューション)、ノーマライゼーション（「当たり前」化)、ユニバーサルデザイン（あまねく＝誰でも、どこでも)、インクルーシブデザイン（ バリアを引き受けさせられていた「当事者」視点）である。

重要な点は、いずれの場合においても、段階が移り変わっての発展というよりも蓄積され折り重なっていく発展がイメージされていることであろう。

さらに、社会デザイン、social design の発展を、「社会を『良くする』から 社会を『変える』へ」として、「狭義の social design がたんなるアイデアや輸入」であったのに対し、次の段階の「社会デザインは社会の課題解決（ソリューション)」を目指し、さらに「Social design は構造的・論理的で、イノベーションを生むデザイン」であるとした。中村先生はこうした社会デザインの特質として、領域横断性・越境性・学際性・創発性をあげている。

さて、では社会デザインとは何か。中村先生はこれまで「社会デザインについて説明はするが、あえて定義付けはしない」というスタンスを（同じく研究科創設メンバーである北山晴一名誉教授と共に）取ってこられた。それは「既成のフレームワークに狭く押し込められるリスクを回避し、多様な研究・教育・実践にひらかれた可能性を持続させる」ためである。しかしそれは「学」としての志向を放棄しているわけではない。「論」「研究」という立ち位置の利点を活かしつつ、「学」として必要な要件について自由闊達な議論をしていくための機は熟したという。

中村先生は、あらためて社会デザイン（学、研究）のこれからについて論を展開された。曰く、対象としての〈社会〉については「無条件に可視化された「実体」としての社会はない。それは個々人のレベルに解消されたり、逆に個々人の行為や思考のたんなる集合や有機体でもない。だからこそ、そこに方法としての〈デザイン〉の可能性も存在する。」

方法としての〈デザイン（思想)〉については「誰かが全体や経過を操作的にデザインするわけではない。For から with、では担い手は誰か？」と問いかける。

社会デザインの意味（役割・機能）は、課題解決であり、価値創造（共創）でもあるが、いずれかに一面化されるものでもない。プロセスとしての社会デザインの参照例として内発的発展論をあげて中村先生のご発表は終わった。

中村先生の立教大学の専任教員としてのご定年は、中村先生ご自身のキャリアや社

会デザインの実践の一つの区切りではあっても、到達点でも終着点でもない。新たなお立場、新たなステージ（舞台・段階）で益々の進化と深化、ご発展とご活躍を確信し、その精力的な研究と活動により、引き続き、私たちに大きな刺激をいただいていきたい。

2022 年 1 月

21 世紀社会デザイン研究科教授
長　有紀枝